

と思いました。今度はじめて私自身、六月にはその年齢になることを知りました。昭和二十年敗戦、海軍から復員、ただちに解剖学教室小川講座にはいつて助手、助教、教授と、思えば長いあいだ、お世話になりました。

先生は一生のあいだに三人分以上のしごとをされました。

第一に脳の解剖学。大脳の赤核の破壊実験により、その機能を、繊維の変性実験によって伝導路を証明することに成功された。この機能解剖学の先駆的業績によって学士院賞をお受けになった。

第二にこの赤核の比較解剖に用いたイルカの正確な種属決定に迫られ、十九属二十七種を確認、うち十二種は本邦初記録となった。クジラ博士として知られる所以である。

第三に興味としてはじめたと自ら言われる医史学を東大定年後順天堂に迎えられ、これまた開講二十周年を祝われることになった。昭和五十年宮中講書初めでは解体新書についてご進講申し上げられた。

最後にエピソードを二つ三つ。

キノコ狩り。土曜日の朝は教室員であれ、だれでも捕まったが最後「キミ明日暇かネ」と聞かれる。キノコ採りに誘われ、一日のおつき合いを覚悟しなければならぬ。これがなかなかことわりきれないのである。

話好き。教室全員昼飯は弁当持参、先生の話をきくのが楽しみでもあり、なかなか中座しにくくて困ることも。同じ話もある。「キミこれ話したかな？」みな初めてのような曖昧

な返事をする。金沢大学の山田致知君(名誉教授、故人)は物真似がうまい。二人だけのとき、先生から何度も聞いた話を、うまく真似る。ある時先生に「先生よりうまいですよ」というと「ほー、一度聞いてみたいですよ」と。

最後に知るひともし少ないと思う話を。先生は教授室の真ん中で首から白い布をかけて椅子に腰掛けていられる。助手が白い洗面器にお湯をいれてくる。病院の好仁会の男が入る。床屋である。東大ひろしといえど、いや全国どこの大学にも、こういう先生はいないのではないか。

日本医史学会理事長としての小川鼎三先生

岡田靖雄

1

先生が日本医史学会に入会されたのがいつか、はわからない。一九四三年(昭和十八年)一月、山崎佐理事長から先生は理事に指名された。一九五三年に山崎理事長から内山孝一理事長になって、日本医史学会の活動はやや活性化したものの、まだ不安定だった。先生が会長をされた第六一回日本医史学会総会で、内山理事長がやめて先生が理事長になられた。二年后に先生は東京大学教授を定年退官されて、順天堂大学医学部教授に就任され医史学教室をひらかれた。学会事務局も

この教室におかれた。総会は一九六〇年から、例会は一九六二年から定期化した。雑誌の定期化はおかれて一九六八年になる。

ともかくも、小川理事長のもとで日本医史学会は戦後の混乱・低迷期を脱して、安定・発展の段階にはいった。これには、日本が安定してきたことがおおいが、先生のお人柄によるところもおおきい。また、先生の周辺の方がたの下支えもあった。

総会では先生は、会場をほとんどはなれることなく、報告に耳をかたむけておられ、ときどき抑制された適切な発言をされていた。

先生を日本医史学会中興の祖とおよびすることは、決して過褒ではない。

2

師の過りをしりて、たださざるは門下の怠りなり、という。先生は、一九四五年三月四日の第五四回医家先哲追薦会について、一部の役員が回向院に参拝したので、成立したとしてよい、とするされ、その六日後の大空襲で回向院が全焼した、とするされている。だが、回向院の空襲による全焼が二月二五日であったことは、おなじときにおこなわれた緒方富雄講演からもあきらかである。となると、第五四回医家先哲追薦会がおこなわれたかどうかあやしくなってくる。これは日本医史学会総会の回数を取り方にも関係することであ

る。

ついでにかけば、緒方富雄は解体記念碑に小塚原観蔵の日を「一七七一一年・明和八年三月四日」とするが、一七七一一年なら四月一八日である。ここでは、太陽暦・大陰暦がキメラ的に併記されてしまったのである。

わが先達たちも誤りをした例で、後の戒めとしなくてはならぬ。

3

わたしの東京大学医学部入学は、一九五一年、先生五〇歳の年、ちょうど五〇年まえになる。先生のお顔は、『自然』誌に一九四八年、一九四九年にのった、脳および鯨についての論文で存じあげていた。四月一六日から六月四日まで組織学の、六月六日から二月六日まで内臓学の講義をうかがったが、そのなかで先生はたびたび解剖学史にふれられた。なかでも、四月二五日にうかがった麻田剛立のことはたいへん印象的であった。学生のなかでも、「〇〇は、です、な」という先生の口真似がはやった。

脳研究室での先生の姿は加賀乙彦(小木貞孝、精神科医)の『頭医者青春記』にえがきだされている。もつとわかい頃の先生は、石上玄一郎「クラーク氏の機械」(一九四三年『中央公論』)に、翌年小説集『精神病学教室』にのる。石上氏は当時創元社の社員で、脳研究室の懸田克躬氏のところに入出入りしていて、猿の赤核破壊実験していた先生に目をつ

けたのである。

師の君に剛立がことききしより

はやもすぎたり五十年の日子いそとほ

4

先生の仙台時代の友人に柘植秀臣氏（法政大学教授・生物生理学、民主主義科学者協会幹事長）がいた。氏とやっていた条件反射研究会で、先生のお話しをうかがったこともある。この柘植氏の話しに、中国の天才的脳科学者陶烈（一九〇〇—一九三〇）の名がときどきでてきた。京都、東京にまなんだ陶はときどき仙台にもいき、陶、小川、柘植の三人の交友があった。先生からも、陶烈のことをほんのすこしきいた。一度、陶烈について小川、柘植の対談を実現させたいとおもっていたが、お二人ともなくなつて、いま陶烈をする人はいない。一九八一年五月二九日にわたしは『私説松沢病院史』をだし、九月一二日に、この本について意見をはなしていた。会をした。先生はそれに出席されて、自分も精神科にいろいろという気もあつたが、助教授にされて解剖にすわつた、脳研と松沢との野球の試合につれていかれたとき、とるのはだめだが、打撃には自信があつて代打ででた、でもまけた、といったことをはなされた。

呉秀三先生は一九三二年三月二六日になくなつた。一九八二年三月二〇日にだした『呉秀三 その生涯と業績』には、先生の序文をいただいた。三月二七日におこなわれた呉秀三

先生没後五〇年記念会は、先生が会長であつた。そのときの写真をとりにだしてみると、大先生がずらりならんでいる。ずいぶんにはなやいだ会合であり、そこでわたしに花をもたせてくださったのは先生だった。

講堂で、うつむいていた顔をあげて、「麻田剛立は、です、な」とかたりだされた先生のお顔、お声はありありとよみがえってくる。

顔あげて剛立がことかたられし

御声は今ぞよみがへりくる

小川先生、ありがとうございます。

東大脳研時代の小川先生

萬年 甫

小川先生と私とを結ぶ絆は、学生時代に先生より組織学の講義を受けるとともに、脳研（医学部附属脳研究室）で人脳の連続標本を勉強する機械を与えられたこと、卒業してからはその脳研で十一年に亘つて研究指導を受けたことであつた。

先生の卓越した御業績や御人柄については、既に多くの人の筆によつて十分に世に知られているが、昭和十九年春から昭和二十年春に至る戦争末期の一年間の脳研における先生の御